ピアホームだより

2026. 2. 1

法人勉強会

先月は、『精神障がいと依存症に共通する「生きづらさ」への支援』をテーマに法人全体で勉強会を開催しました。

お招きしたのは、東京通信大学の稗田里香教です。稗田教授は長年にわたり医療ソーシャルワーカーとして社会福祉、精神保健福祉が交わる現場に身を置きながら、活動されてきた先生です。

今回は法人としても障害のある人の生きづらさへの支援をソーシャルワークの視点で考える貴重な機会となりました。

研修の前半では依存症について学びましたが、依存症は脳の機能障害であり、生きづらさの表現であると理解することが大切であることを改めて感じました。印象的だったのは、スピリチュアルペインという言葉。社会が生み出す機能不全家族（虐待、過度に厳格、依存の問題など）の中で生きづらさの体験や震災などこれまで経験したことのない危機状態からくるトラウマ、ストレスなどのことをいうそうですが、さまざまなアディクションの根っこにある痛みを指すもの。これらを考えるとき、その人の状態を表面的なものだけで捉えるのではなく、根っこの部分を理解することが非常に大切だということです。

私たちはクライエントを理解しようとするとき、アセスメントをしますが、このときどれだけ本人像に近づけるのか、その重要性を考える機会となりました。

後半では、ワーク「喪失と孤立のシュミレーション」を受けました。自分の周りから大切な人やものが離れていく過程を疑似体験し、本当に喪失から孤立を感じるワークでした。クライエントが感じている痛みや見ている景色を少しは見ることができたような気がします。これまで多くの研修でさまざまなワークを体験してきましたが、このワークほどインパクトのある疑似体験はなかったように思います。

私たちは社会福祉サービス提供の現場で日々試行錯誤しています。さまざまな事情で生きづらさを抱えながら自分の人生を生きている人がそこにいます。それぞれの事業所や支援者にもそれぞれの歴史や経験があり、一つとして同じものはありません。その意味で、実践の現場は個別的であらゆる可能性があると同時に、それぞれの事業所には、依って立つ根拠と目指すべき理想で成り立っています。依って立つ根拠とは法や制度や規範であり、客観的な指標として社会の中では必要なものです。

この一つとして同じものはないものに対して、私たちは制度を活用し、かつ縛られながら対応しています。この点に常に矛盾を感じ、間に立って悩み、絶対の正解がない問いに立ち往生することになります。どれだけ研鑽を積んでも、いつも上手くいく答えを選択できるわけでもないのです。

今回の研修はソーシャルワークという観点から考えることを改めて学びました。そもそもソーシャルワークとは何かという根源的な問いもありますが、人と環境の交互作用で生きづらさが生じているとすれば、そこに働きかけるのがソーシャルワークです。その人と向き合い、対話し、難しさと向き合うことで互いに悩むことから始まるのだろうと思います。対人援助とは、まず互いに悩むことがあってこそで、制度やルールなどの規範みたいなものが先に押し付けられるものではないと思います。

実践現場とは常にこの葛藤を抱え、悩み、それでも人の営みを支えていく場としてそこにあり、人と人が共に生きることの問いを社会に発しているように感じます。

2 月の予定　5.9.12.26 日：ピアⅠ・Ⅱ夕食会